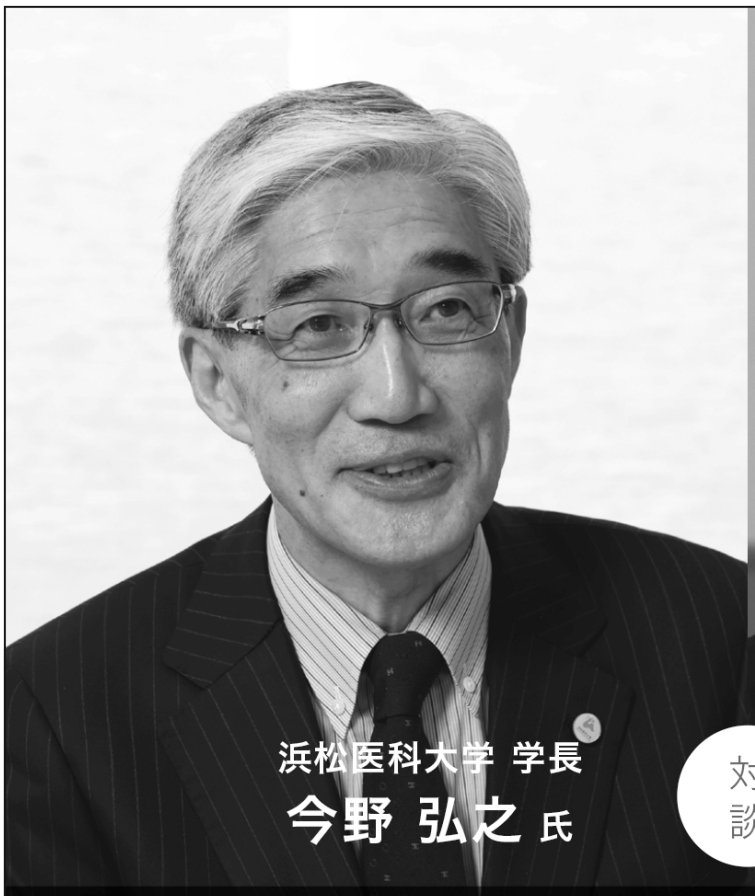
時代を先取り 世界に飛翔する医大へ

国立大学法人浜松医科大学は2024年6月7日に開学50周年を迎える。開学以来、「優れた医療人を育成し、独創性ある研究成果を世界に発信し、地域医療の中核的役割を担う」という建学の理念を貫き、教育・研究・診療という医学教育機関の3大使命を果たしてきた。それに加え、最近は世界に飛翔（ひしょう）する人材の育成を目指した国際性を養うカリキュラム導入や、産学連携も視野に入れた先端光医学研究などにも積極的に取り組んでいる。今野弘之学長が、医学科1期生OBである松本吉郎・日本医師会会長とともに、「浜医の半世紀の足跡と将来展望」を語り合った。



浜松医科大学 学長
今野 弘之 氏

こんの・ひろゆき　1978年3月慶応義塾大学医学部卒、85年米カリフォルニア州立大学サンディエゴ校に留学。87年3月医学博士（慶応義塾大学）。同年5月浜松医科大学に第2外科（消化器外科）の助手として赴任。98年8月外科学第2講座助教授、2004年11月に同教授。14年4月に医学部附属病院長に就任。16年4月から現職。20年から一般社団法人日本専門医機構の理事も務める。

対談

日本医師会　会長
松本 吉郎 氏

まつもと・きちろう　1980年3月浜松医科大学卒、同大皮膚科に入局。85年日本皮膚科学会皮膚科専門医、86年日本形成外科学会形成外科専門医。88年4月松本皮膚科形成外科医院（さいたま市）を開業。2010年4月埼玉県医師会理事、11年4月埼玉県医師会常任理事、14年6月大宮医師会会長、16年6月より日本医師会常任理事。22年6月から現職。

卒業生の貢献で関連病院88に

松本　私は1974年入学の浜医1期生になります。入学時は校舎が完成しておらず、浜松市内の別の場所に建てられた仮設プレハブ校舎で1年間勉強しました。夏でも冷房が効かずに屋根にホースで散水して授業を受けたことを思い出します。2年生になって現在の半田山キャンパスに移り、77年末には大学附属病院も完成しました。私は大学卒業後そのまま大学病院に残り8年間勤務しました。

今野　私は87年、34歳の時に外科の助教（当時の呼称は助手）として浜医に赴任しました。その後、医局長などを務めたのですが、当時は関連病院が少なく、いろいろな病院に「外科医を採用してくれませんか」と頭を下げて回りました。ただ、採用された浜医の卒業生の評判は非常に良く、誇らしい気持ちになったのを覚えています。今では静岡県内の関連病院は88まで増え、そのうち28病院の院長は浜医卒業者や医局関係者です。

松本　新設医大だったため、周囲の期待も大きく、若い時から責任ある仕事を任せてくれたと思います。当時は眼科、耳鼻科、皮膚科などの診療科がない病院も多く、そうした病院は浜医卒の医師を採用して科を新設するケースもありました。3年目くらいの医師でも一人医長として仕事を任せてもらえました。私は形成外科に興味がありましたが、当時は大学病院でも形成外科は独立しておらず、皮膚科が扱っていました。「広い視野を持って勉強した方がよい」という当時の主任教授のご指導もあり、今では考えられませんが、結果的に在籍中に皮膚科と形成外科の2つの専門医資格を取得できました。恩師には今でも本当に感謝しています。

今野　卒業生の地域医療への貢献度の高さは浜医の特徴です。例年、卒業生の6割程度は静岡県内で働いています。県外からの入学者も3分の1程度は静岡県に残っています。

松本　私の同級生も7割くらいは卒業後、浜医附属病院に勤めました。6年間共に勉強した後、さらに同じ病院で過ごすわけですから、当然、結束力は強くなります。これは私にとって今でも大きな財産になっています。

今野　建学の理念は内科診断学の泰斗で初代学長の吉利和先生や、放射線医学の世界的権威で初代附属病院長を務めた高橋信次先生らが中心になって定めましたが、50年を経ても脈々と受け継がれています。新型コロナの感染拡大中でも学生の2週間以上の臨床実習の中断はありませんでした。「地域医療の中核的役割を担う」という理念を実現すべく、学生たちにはしっかりと教育の機会を提供できたと自負しています。

DX駆使し医療ネットワーク

松本　新型コロナでパンデミックが起きた際には過酷な勤務を強いられた医療従事者も多く、医療分野の働き方改革への関心が高まりました。働き方改革の主たる目的は勤務医の健康確保ですが、改革を行うに当たっては、地域医療提供体制をしっかり継続させることや、医療と医学の質の維持・向上を含めた3点が重要になると主張してきました。課題も残っていますが、改革はこれからも進めていくべきだと考えています。

また、パンデミックの体験を通じてレジリエントな（柔軟で強じんな）医療体制を構築しようという動きが進んでいますが、その実現のためには機能分担と地域連携がカギとなり、ネットワークを構築することが重要だという共通認識ができたと思っています。

今野　集約化と機能分化という観点では、来春浜松でスタートする地域医療連携推進法人は象徴的です。市が運営する浜松医療センター（600床）と本学附属病院（600床）が一体となって運営します。双方が医療スタッフなど人的資源を相互有効活用するほか、医薬品の共同調達などでコスト減も期待できます。既に両病院では集中治療室（ICU）の患者データをリアルタイムで共有し、専門医師が遠隔会議できる体制も整っています。今後は役割分担しながら高度医療を提供するケースが増えるでしょう。合計1200床規模になれば、学生実習で希少疾患の症例を学ぶ機会も得られます。さらに双方は車で30分程度離れた距離にあるので、災害時の事業継続計画（BCP）にも寄与します。東海トラフ地震発生の可能性などを考慮すると、2拠点相互バックアップ体制は重要です。まずは中核医療機関2つの連携ですが、将来は地域の中小病院、かかりつけ医、介護施設なども包含するネットワーク構築を目指します。

松本　ネットワークの構築には日ごろから率直に意見交換できる顔の見える関係を築いておくことも必要です。静岡県医師会、浜松市医師会をはじめとする地域の医師会、県内の各病院など随所に浜医の卒業生が在籍していることを考えますと、浜医は県内の医療体制構築においてイニシアチブを発揮できるキープレーヤーといえます。

今野　集約化と機能分化を可能にするネットワーク構築にはデジタルトランスフォーメーション（DX）が不可欠です。医療DXの本丸は医療情報の共有です。電子カルテの共通化は各病院のITベンダーが異なるといった事情もあり、実現までには時間がかかるため種々の工夫を重ねています。放射線、内視鏡、病理といった領域では既に画像情報をデータ化してクラウドに保管し、診断に生かしています。各種センサーを設置したベッドサイドケア情報統合システムで患者さんの状態をモニターし、看護師の負担を軽減する取り組みも進んでいます。

松本　日本医師会としても、医療DXの進展は患者さんへの安全・安心でより質の高い医療提供を実現するばかりでなく、医療現場の負担軽減につながると考えており、今後も全面的に協力していきたいと思います。

知財切り出した新会社も設立

今野　浜医は国際化にも注力しています。2019年に学内に国際化推進センターを開設、海外の提携大学病院などで学生が1カ月程度の臨床実習を経験できる体制を構築しました。24年には約60人の学生が海外で実習を経験しました。また3年生を協定校に派遣して基礎医学の実習をさせるプログラムも導入予定です。台湾やタイの医大とも新たに協定を結び、学生交流を拡大していく方針です。

松本　これだけ日本に観光客が訪れるようになると、医療の国際化は避けて通れない課題です。8年前に日本医師会でも外国人医療に関する委員会を立ち上げましたが、当時常任理事だった私が担当となりました。その経験から、日本に外国人向けの医療サポート体制を広げていくことは急務だと実感しました。英語以外の言語への対応や宗教など文化面への配慮など、きめ細かい対応も必要です。そういった意味でも浜医が取り組む国際化教育はとても意義深いものだと考えています。

今野　浜松が産業集積地で優良企業が多いのも、我が校のカリキュラムに独自性を加えています。医科大学でアントレプレナーシップをカリキュラムに組み込んでいるのは珍しいですが、地域の起業家も招き1年生にレクチャーしてもらっています。光医療関連の先端研究を進めているのも特徴で、これも地元企業との協力関係のたまものです。24年4月には光量子医学研究のさらなる発展を目的に、既存研究組織を改組統合して光医学総合研究所を設置しました。分子、細胞から個体までの先端的イメージング技術の確立と、それを用いた病気の原因解明や診断法・治療法の開発を目指します。

同時に大学の産学官連携部門を切り離して新会社「はままつ共創リエゾン奏（かなで）」を設立、全ての知財を移管しました。知財の全面移管は国立大学法人では初の試みです。大学の医療面のニーズと光医療などの研究シーズを、国内外の大学、企業などとのコラボレーションで有効活用したり製品化したりするのが狙いです。そのためには迅速な意思決定が可能な新会社が必要と判断しました。

松本　浜医のチャレンジ精神の表れですね。こうした取り組みが地域医療の一段の質向上につながると期待しています。

沿革

1974年	6月	浜松医科大学開学・医学部医学科設置
1977	4	医学部附属病院の設置
1980	3	医学部医学科第1回卒業式
1995	4	医学部看護学科設置
1999	12	光量子医学研究センターの竣工
2004	4	国立大学法人に改組
2007	1	分子イメージング先端研究センター設置
2011	4	メディカルフォトニクス研究センター設置（光量子医学研究センターと分子イメージング先端研究センターを改組・統合）
2014	7	学章及びシンボルマークを制定
2016	1	光尖端医学教育研究センター設置（メディカルフォトニクス研究センター、動物実験施設、実験実習機器センター、産学官共同研究センターを改組・統合）
2019	3	医工連携拠点棟竣工
	4	国際化推進センター設置
2021	11	先端医療センターの竣工
2024	4	開学50周年を記念し「光医学総合研究所」を設置

1981年ごろ

2023年1月ごろ

地域医療連携推進法人

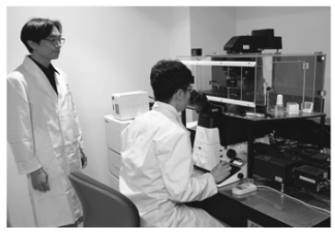
地域医療の機能分担や業務効率化を目的に、複数医療機関が参加し、都道府県知事の認定を受けて設立する一般社団法人。持ち株会社のような形でのグループ化ができない医療分野において、業務連携による診療科再編や医薬品共同購入によるコスト低減、間接部門の重複回避などを進める手段として注目されている。2015年の医療法改正で制度化され、17年の施行以来、各地で設立されている。

静岡県では既に「ふじのくに社会健康医療連合」「静岡県東部メディカルネットワーク」が設立済み。来年4月をめどに浜松医科大と浜松市が運営する浜松医療センターが中核となって設立予定の法人は県内3つ目となり、大規模病院同士の地域医療連携推進法人への参画は国立大学法人としては初の試みとなる。

将来は地域の中規模病院やかかりつけ医、介護施設などとも連携してネットワークを構築

光医学

分子、細胞から個体までを先進的な光イメージング技術を活用して研究し、それによって未知の生命現象の解明や、疾患の新たな診断法や治療法の探求、創薬への貢献などを目的とする医学領域。既に脳深部での光診断技術の開発や質量顕微鏡の実用などで成果が出ているという。浜松ホトニクスなどの光関連企業が集積しているのも、浜松医科大が研究開発を進めるうえでの利点となっている。



広告

開学50周年 ～この先もずっと地域の皆様と共に～

国立大学法人 浜松医科大学

https://www.hama-med.ac.jp/

企画・制作＝日本経済新聞社
Nブランドスタジオ